

## 瓜に蝶鳥刻文壺

細見良氏蔵

総高 二三・六釐  
〔図版九〕

神戸市北区淡河町神影（兵庫県美囊郡上淡河村大字神影）にある石峯寺<sup>しやくぶじ</sup>の境内から、経塚出土品や骨蔵器などがこれまでに多数出土したことについてはよく知られているが、これら出土品の多くは寺外に流出してしまい、その全貌を理解することができなくなっている。しかし幸いにも経塚出土品についてはまとまった資料があり、石峯寺経塚として著名になってはいる。石峯寺経塚といっても広い境内に一、二にとどまらず平安時代後期から室町時代にかけて経塚が築造されたことを考えれば、「石峯寺経塚」については今後の精査が必要なおも事実である。

この陶製壺についても出土年次、出土状況など全くわからない。十二世紀の製品と考えられるこの陶製壺が注目されたのは、肩の部分に瓜に蝶鳥文が陰刻されていたことにはじまる。製作年については大方の研究者の一致するところであったが、製作地については常滑とか渥美とかいろいろ論議をよびいまだ結論に達していなかった。こうした状況のなかで、最近、兵庫県教育委員会が丹波古窯の発掘調査を行い、この陶製壺が丹波製品ではないかという、注目すべき陰刻文様のある陶片が出土した。出土した陰刻文様のある陶片は十数例であるが、陶片は数千点出土している。これらとこの陶製

壺を比較してみると、製作技法的にみてもこの陶製壺が丹波製品ではないかと考えるに至ったので、ここにとりあげ、その位置づけを試みようと考えたのである。ここにいう丹波製品とは、兵庫県多紀郡今田町一帯で製作された製品（丹波焼）をいうが、中世における丹波古窯址は五基あることが知られており、ほかの中世古窯と同様に平安時代後期から鎌倉時代初期にかけて成立したと考えられている。しかしいずれも学術的な発掘調査が行われておらず、今回のも三本峠古窯址の物原の調査であった。現在、これらの出土品が整理されている段階であるので、結論じみたことは差し控えなければならぬが、兵庫県教育委員会では十三世紀中葉の製品ではないかと考えられているようであり、そうするとこの陶製壺とは製作年代についてすこしずれがある。このことは丹波古窯の成立がいつであったのかという重要な問題に関係してくるのであり、今後の本格的な窯の発掘調査の俟たれるところである。ちなみに、この丹波古窯と石峯寺とは直線距離にして約十五キロ内外の位置関係にある。

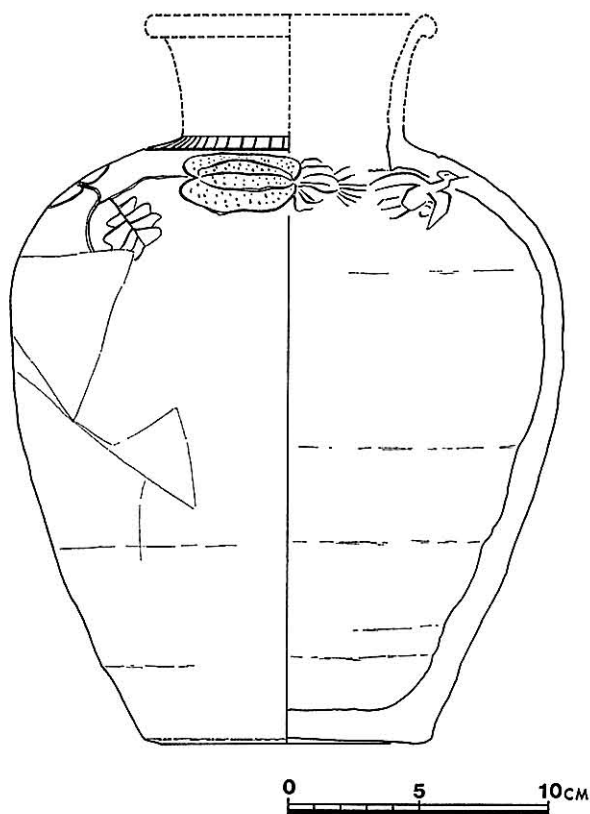
この陶製壺の品質形状をみると、総高二三・六釐、肩張り最大径二一・二釐、底径一一釐。口縁部は人工的にうち欠いたと思われるが完全に欠失しているし、壺体も数十個の破片を接合したもので所が欠損している。焼成は堅質で、肩から胴にかけて灰釉がかかる。欠失した口縁部には五ミリの間隔で沈線がひかれており、今回の出土品にもこの沈線のある陶片が出土している。肩部には阿古陀瓜とその蔓が陰刻されており、蔓と葉の間に蝶と鳥が配され、そのなかに「大」という陰刻文字が認められる。「大」という陰刻文字は常滑製品にままた認められるが、今回の出土品にも二例ほどの「大」という文字のある陶片が確認されている。これまでの陶器研究で

は、こうした器形とその文様表現などからして、十二世紀の常滑製品ではないかというのが有力であったわけであるが、胎土といい、焼成といい、この陶製壺は丹波古窯のものと非常に近い製品と考えられる。ここで従来不明確であった石峯寺経塚出土品を再整理し、年代観を考えてみたい。

石峯寺経塚出土品といわれるものは大きく二つにわけられる。その一は、昭和二十三年四月に「播磨国石峯寺経塚出土品」として重要美術品に認定されたもので、その内訳をみると、銅経筒一口、朱書法華経残片一枚、経巻残塊五個、瑞花鴛鴦八稜鏡一面、松喰鶴鏡一面、瓜蝶雀鏡一面の六件である。これらは大正十一年十月に石峯寺竜ヶ峯頂上の経塚より発見されたというものであるが、出土状況については全く不明である。これらはいずれも平安時代後期のものであるが、この出土品のうち経巻残欠に永久五年（一一二五）の奥書銘のある経巻と瓜蝶雀鏡が、この陶製壺と関連づけられて論じられたようである。経巻片はその製作年代についてであり、瓜蝶雀鏡はそのデザインについてであった。製作年代についてはこの経巻片の年代と直接関連づけられて論じられたという意味ではないが、陶製壺の製作年代が十二世紀と考えられる時、有力な手がかりとなったのである。もう一つの瓜蝶雀鏡は径一二・五厘の上質の白銅鏡で、内圈には瓜二株と双雀が左右対称に配され、外圈には瓜唐草文と双蝶が配された、いわゆる藤原鏡である。阿古陀瓜と双蝶双雀を配した文様の展開と陶製壺の肩部文様との類同性より、この陶製壺が石峯寺経塚の出土品ではないかということを肯定させる論拠になったともいえる。このように大正十一年の出土品は、陶製壺の製作年代観を考えるうえで注目されたのである。



瓜に蝶鳥刻文壺



その二は、この陶製壺と銅造鍍金経筒、経巻残塊の三件である。しかし、この三件については出土年月日、出土地などについて不明である。鍍金経筒は平安時代後期の特徴を備えているが、この陶製壺が外筒で鍍金経筒とセットになるといわれてきている。このことについては出土状況が不明である今日、確認することはむづかしい。このほか室町時代の経塚出土品や経塚標識が境内にあることも報告されている。以上のように、石峯寺経塚出土品についてその出土状況のわかっているものはないが、経巻奥書銘の「永久五年三月十五日勸進僧十方」ということからして、十二世紀の初頭に竜ヶ峯頂上付近に経塚が築造されたと考えていいようである。しかしこの陶製壺については、その用途にしても果たしてこれが経筒の外筒として使用されたものなのか、あるいは骨蔵器であったのかも明確に

はしない。

丹波古窯の成立についていつごろに求めるのか不明な点もあるが、ここに紹介した瓜に蝶鳥刻文壺が丹波製品であり、十二世紀の製品であると考えられるならば、その成立について重要な問題を提起している陶製品ということになる。従来はその陰刻文様のみが注目されてきたが、今後はこうした丹波古窯の成立という観点でも注目されてこよう。

(難波田徹)